



ふくだ  
Fukuda

滑川町立福田小学校 学校だより

9月号 令和 3年 9月 1日

電話 0493-56-2651 FAX 0493-56-2643

## 文字の獲得は光の獲得でした

今日は、藤野高明さんのお話をします。藤野さんは、今年83歳になる方です。

藤野さんは全盲であり、両手がありません。二重の障害がありましたから大変ご苦労されましたが、大阪市立盲学校の社会科の先生をお務めでした。

藤野さんは、どうして二重の障害を持つこととなったのでしょうか。藤野さんが小学校1年生の時、太平洋戦争が日本の敗戦で終わりました。その翌年の1946年の7月18日の朝、不発弾が突然爆発したのです。不発弾とは、爆発せずに放置された爆弾のことです。藤野さんは、不発弾とは知らずに長さ4、5cmほどのパイプ状の金属を拾い集めていたのです。一緒にいた弟さんは即死でした。藤野さんは、両目の視力と両手を一瞬で奪われてしまったのです。

それ以来、藤野さんは、学校に行けなくなりました。藤野さんが通っていた小学校の近くには、福岡県立盲学校がありました。藤野さんの障害を理由に入学を断られてしまいました。藤野さんは、人生の中で大きな意味を持つ時代に教育を受けることができなくなってしまったのです。

学校に通えなくなった藤野さんは、やがて点字と出会います。入院先の病院の看護師さんに読んでもらった北条民雄の「いのちの初夜」で、視力と手指を失った人が唇や舌を使って点字を読むことを知ったのです。点字は、とてもシンプルで明解な仕組みを持った文字で、それを覚えるのに多くの時間はかかりませんでした。でも問題は、唇を使って読めるようにすることでした。最初は、ザラザラとツルツルがわかるだけで、ザラザラの中に綴られている文章を読むことなど全くできませんでした。しかし、「継続は力なり」でした。何度も何度も試みているうちにザラザラの中に文字が浮かび上がってきたのです。そしてその文字のかたまりが言葉となり、文章となって理解できるようになりました。「文字の獲得は光の獲得でした。時間は掛かりましたが、文字を読み、行を追って、そこに書かれていることを読み解いていく作業は、決して苦痛なものではありませんでした。わたしは、光を失った自らの世界に、一筋の光が差し込んでくるのを感じました」と藤野さんは語っています。点字を書くのには、また別の苦労が伴いました。かろうじて残った左右の前腕をつかって点筆をはさみつけるように持ち、背中をこごめて点字板にポツポツと穴をうがちました。根気強く続けているうちに、時間はかかっても、正確な文字が書けるようになりました。やがて点字タイプライターで、早く楽に点字を打てるようになりました。

点字を何とかマスターすると「友達が欲しい。外へ出たい。みんなと一緒に何かをしたい」など、藤野さんの心にはいろいろな思いが浮かんできました。そして、「勉強したい。学校へ行きたい」と猛然とした学習意欲が生まれてきたのです。ところが藤野さんは、小学校2年生の1学期までの教育しか受けていません。基礎的な学力は身に付けていませんでした。国語や社会、理科などは、人に本を読んでもらったラジオを聞いたりしてある程度理解できましたが、数学や英語は、ほとんど理解できませんでした。救世主は、北条民雄の「いのちの初夜」を読んでくれた看護師のKさんでした。数学と英語を熱心に教えてくれたのです。

点字の読み書きとある程度の基礎学力を身に付けた藤野さんは、福岡県立盲学校への入学を希望したのですが、その時もまた、重い障害を理由に断られてしまいました。希望を失いかけてましたが、福岡から遠く離れた大阪市立盲学校中学部2学年への編入が認められたのです。満20歳の中学2年生です。学校は、想像していた以上に楽しく、活気のある毎日を過ごしました。盲学校中学部高等部での5年間の生活は、藤野さんにとって得がたい体験をもたらしました。多くの友達が出来たこと。素晴らしい教師との出会い。そして社会科や数学など、各教科の勉強ができたことなど、それらの全てが藤野さんの青春を充実させました。盲学校での生活が充実すればするほど、不就学のうちに過ぎ去ってしまった13年が惜しまれ、悔しく感じました。このような悔しさを後輩たちには絶対味わせないとも考えました。

藤野さんは、盲学校での生活を通して、先生になることを目指すようになりました。先生になるためには、教員免許が必要です。免許を手にするには、大学に行くしかありません。しかしその頃の日本の大学は、障害者を受け入れてはいませんでした。藤野さんは、道なき道を進むこととなります。

藤野さんは、自分が障害者であることを隠して、日本大学の通信教育部に入学しました。通信教育は基本的には自宅での学習ですが、一般の学生の長期休みにスクーリングと呼ばれる面接授業を受けなくてはなりません。でも、藤野さんは自分の障害を隠して入学したため、そのことが大学側に分かるとどんな結果になるのが恐ろしくてなかなかスクーリングへの参加に決心がつかず、藤野さんの不安は的中します。藤野さんの障害を知った大学の担当者は、スクーリングを諦めて福岡に帰るように迫りました。「ここで諦めしまったら、もう二度と大学で学ぶことなどできなくなる」という必死の思いで踏みとどまりました。藤野さんを支えてくれたのは、福岡から共に上京し合宿しながら受講していた学友達でした。授業の取り方をやりくりして、代わる代わる藤野さんに付き添ってくれたのです。こうした苦労の末、5年半かけて藤野さんは大学を卒業しました。32歳の春でした。

教員免許は手にしましたが、今度は教員採用試験に合格しなければなりません。ところが当時は点字による採用試験は実施されませんでした。1971年になってようやく大阪で実施され、見事に合格を果たしたのです。ところが、あろうことか今度は、藤野さんの障害を理由に正式採用が見送られ、非常勤講師として大阪市立盲学校高等部で勤務が命じられたのです。採用試験に合格したのに正式に採用されないことに怒りと不信感が募りましたが、藤野さんはこの話を受けることにしました。藤野さんはこの時の心境を「わたしは、どんな形でもいいから早く教壇に立ちたいと思いました。本採用というホームベースに達する為には、たとえ振り逃げでもデッドボールでも何でもよいから、一塁ベースに出たいと思いました。そして出た以上は最善を尽くして働きたいと考えました。授業を受ける生徒たちにとっては、教師が本採用であろうと、非常勤講師であろうと、そんなことはなんの関係もないと思ったからです」と語っています。1972年9月、世界史の授業を初めて担当しました。内容は古代ギリシアの民主政治についてでした。33歳。藤野さんが教壇に立ったことは新聞が取り上げました。新聞はその見出しに「青年教師」という一語を使いました。その一語は晴れがましいばかりに、藤野さんに大きな勇気を与えました。

「教えることは学ぶことでした。教科書はもとより、参考書やいろいろな資料を点字テープを使ってよく勉強しました。歴史の進歩と社会の仕組み。それに人間の美しさや醜さを伝え、生徒たちと共にそれを確かめていく授業は本当に楽しいものでした」藤野さんの言葉です。藤野さんの努力が実り、翌年の9月に正式採用となりました。この知らせを聞いた生徒たちは藤野さんがびっくりするような大きな拍手と歓声で喜んでくれたそうです。様々な困難の中で先生を務めた藤野さんのよりどころは、授業でした。よくわかるよい授業の実施を心掛けたそうです。「障害者にしてはよい授業だ」と言われたら負けだと思っていたそうです。

藤野さんは、約30年にわたる教師の仕事を全うしました。

「視力と肢体の重い二重障害をもったことは、やはり大きな不幸だったけれども、一番やりたかった仕事、すなわち教職に就けたということは、何にもましてわたしの喜びであり、生きがいでしたから、わたしの人生は決して不幸なものではありませんでした。障害者にはたまたま、もっとはっきり言えば、いやいやなりました。しかし学校の先生には自ら志し、選びとってなりました。わたしはかねがねこう思っています。自分の障害については、何の責任もない、それは、わたしの選択によっていないからです。一方、自らが選択した教職というものに対しては、大きな責任があると。30年に及ぶ教職生活があったからこそ、わたしの人生は『生きていてよかった』という実感を、わたしに与えてくれるのです」藤野さんの言葉です。

藤野さんは、83歳になった現在も、教員を目指す学生達に熱いメッセージを届けているそうです。

(2学期始業式の言葉より)

## 9月10月の主な行事予定 ※変更が生じる場合があります

9月 1日(水)	2学期始業式	10月 4日(月)	保護者面談開始(12日まで)
2日(木)	給食開始 4時間授業	6日(水)	交通安全教室
3日(金)	不審者対応訓練 引渡し訓練	7日(木)	PTA常任委員会
5日(土)	東京パラリンピック閉会式	8日(金)	学校保健委員会
7日(月)	1年生知能テスト	15日(金)	全校遠足
10日(金)	安全の日	20日(金)	就学時健診
14日(火)	3年生アサーショントレーニング		
20日(祝)	敬老の日		
23日(祝)	秋分の日		

